

農村生活に関する知識への認識と共有化の課題

—兵庫県篠山市 K 地区を事例として—

中塚雅也*・星野 敏**

(*神戸大学・**京都大学)

A Case Study on Difference of Local Knowledge in Various Residents
(Masaya NAKATSUKA, Satoshi HOSHINO)

I 課題と方法

急速にすすむ過疎・高齢化に広域合併が拍車をかけるかたちで、農村コミュニティが弱体化し住民自治や資源管理のシステムが崩壊の危機に瀕している。更に深刻な問題として想定されるのは、担い手のリタイアとともに暗黙知^{注1)}を中心とする地域固有のナレッジ(以下、地域ナレッジとする)が急速に失われつつあることである。地域ナレッジは農業生産や農村生活はもとより、地域資源の保全や自治活動にとっても不可欠なものである。しかし、目に見えないために軽視されやすく、その管理対策はほとんど講じられていない。

その一方で、都市農村交流への関心や定年リタイア層のU・Iターンの動きが高まり、地域を担う主体が多様化している。そこで、このような人々と地域のナレッジの共有をすすめることにより、ナレッジの保全と創造が促されると考えられる。

しかし現状では、地域に関わる多様な人々の間で、どのようにナレッジが所有されているのか、また求められているのかは不明な点が多い^{注2)}。本稿では、より日常生活に密着した地域資源利用および地域活動に関する項目に焦点を絞り分析をすすめることにより、農村コミュニティの多様な担い手間における地域ナレッジの所有と重要度の差異、そして共有化にむけての課題を明らかにすることを目的とする。

注1) 暗黙知は、本来的には認知のプロセス、または、言葉に表せない・説明できない知覚を指すが^[1]、

本稿では知識経営論として野中ら^[2]が示した「経験や勘に基づく知識のことで、言葉などで表現が難しいもの」という派生概念として用いる。対して、文章化、図表化、数式化によって表現できる知識を形式知という。

注2) 地域ナレッジに関しては深町・星野^[3]がため池を対象とした調査により、その管理ナレッジの偏在性と継承の問題を指摘している。

II 対象地と調査方法

調査対象としたのは、兵庫県篠山市のK地区である。K地区は四方を山に囲まれた市内でも辺境といえる地区であり、典型的な中山間地域である。人口は、減少をつづけ1995年では889人であったが、過疎対策の市営住宅(40戸)が整備されるとともに、京阪神の都市部より車で1時間半と交通の便に比較的恵まれることから別荘開発がすすみ、2005年には、937人、330世帯と微増している。しかしながら、高齢化率は31.6%と高く、今後再び人口減少の転じることが予想される。過疎の危機感を背景にし、市内で最も少ない4つの自治会から構成され、まとまりがあることから、先駆的に小学校区単位のまちづくり協議会を設立し、課題解決のためのワークショップを定期的に行っている。また、交流活動も盛んであり、里山のオーナー制度(20組)や小学生キャンプの受入れなどをおこなっている。このように多様なコミュニティの担い手が存在し、地域ナレッジの実態や乖離の把握が可能であるとともに、その共有についての問題意識も高いことから事例として選定した。

調査は質問票調査により実施したが、あらかじめ

め聞き取り調査をおこない関心が高いナレッジ領域を抽出して設問を設定した。なお、質問票には、自治組織や地域づくりワークショップの進め方に関する設問も組み込んだ。

調査対象は、K地区の高校生以上の全居住者に加えて、市営住宅等に住むIターン者である「新住民」、地区外に住む「他出子弟」、継続的に地区での交流活動に参加する「交流者」とした。調査票は、各世帯に4枚と封筒に折り込み済みの他出者用の調査票2枚（返信用も同封）を標準セットとして自治会を通して配布、回収した。結果、計483件の有効回答を得た^{注3)}。

地域ナレッジに関する設問は、地域資源利用と地域活動について5項目ずつ、合計10項目を設定した。その上で、それぞれ「次のK地区に関する知識や技術（ノウハウ）は、あなた自身にとってどの程度重要なものですか。また、それはどの程度、知りやすい・手に入れやすいものですか」と、5段階評価で尋ねた。こうして把握した、得やすさ・所有の程度と、重視度（ニーズ）を集計し、その上で回答者属性、地域との関わり方などとのクロス分析をおこなった。

注3) 他出子弟や交流者へは関係者からの郵送配布を依頼した。全回収数は529件であったが、地域ナレッジに関する設問への回答がないものを除外した483件を本稿での有効回答とした。

III 分析結果

1 回答者の概要

回答者の属性は、性別では男性51.8%、女性48.2%とほぼ同等である。年代では、10・20代9.2%が少数であり、50代25.6%、70代以上24.7%が多い構成であった。また、地域との関わり方については、住民が全体の約6割を占め、新住民（Iターン）と他出子弟が同程度、交流者は少なく5.6%であった。職業については、常勤勤務者が最も多いものの、高年齢の回答者が多いことと関係して、仕事

第1表 回答者の概要

属性		n	%
性別	男性	250	51.8
	女性	233	48.2
年代	10・20代	48	9.2
	30代	60	11.6
	40代	72	13.9
	50代	133	25.6
	60代	78	15.0
	70代以上	128	24.7
地域との関わり	住民	320	63.6
	新住民	64	12.7
	他出子弟	91	18.1
	交流者	28	5.6
職業	常勤勤務者	176	35.0
	自営業・自由業	52	10.3
	非常勤勤務者	64	12.7
	農林業	76	15.1
	学生	13	2.6
	仕事従事無し	122	24.3

第2表 地域ナレッジの重要度の比較（地域との関わり・年代別）

地域ナレッジ		住民	他出子弟	新住民	交流人	20代以下	30代	40代	50代	60代	70代以上	
地域資源利用	農業関係の技術	3.53	3.24	3.51	3.44	3.26	3.33	3.91	3.32	3.85	3.68	B*
	山林の管理	3.68	3.32	3.54	3.85	3.31	3.57	3.95	3.52	3.89	3.89	B*
	自然材の利用方法	3.14	3.23	3.08	3.62	3.19	3.32	3.00	2.95	3.27	3.27	
	植物生物の生息地	3.18	3.11	3.26	3.46	3.22	3.32	3.45	3.01	3.38	3.05	
	地域の料理	3.44	3.30	3.47	3.70	3.26	3.32	3.55	3.25	3.58	3.63	
地域活動	祭礼・祭事	3.77	3.28	3.42	3.54	3.22	3.71	3.74	3.57	4.05	4.16	A**B***
	地域の年中行事	3.53	3.41	3.28	3.58	3.15	3.64	3.35	3.30	3.72	3.88	B*
	イエ付き合い	3.24	2.78	2.95	2.89	2.89	3.29	2.91	3.10	3.50	3.54	A**B**
	近所付き合い	3.77	3.60	3.46	3.16	3.37	3.57	3.61	3.53	4.13	4.16	A*B***
	自治会運営	3.63	3.45	3.47	3.12	2.96	3.39	3.77	3.42	4.08	3.95	B***

注:1) 年代のクロス集計は、地域との関わり:「住民」のみ抽出したもの。

2) 検定は分散分析の結果。A:地域との関わり間, B:年代間で有意。*p<.05, **p<.01, ***p<.001。

に特に従事していない人も多いのが特徴である。なお、年代や地域の関わりにおいて、性別に大きな偏りはみられなかった。

2 重要度の比較

第2表は、10項目について重要度を「5：非常に重要、～1：全く重要でない」の5段階で尋ねた平均点を、地域との関わり方（住民、他出子弟、新住民、交流者）、そして「住民」のみを抽出した上での年代とクロス集計したものである。平均値の差の有無は、一元配置分散分析により、0.1%、1%、5%水準で検定した。

その結果、地域との関わり異なる主体間、年代間にて、各項目のナレッジの重要性の認識に差異があることが確認された。

まず、住民、他出子弟、新住民、交流者の別でみると、地域資源利用に関しては、全般的に、交流者や新住民は住民と同等またはそれ以上に重要

と認識していること、他出子弟の重要度は全般的に低いことがわかった。なかでも特に、交流者は山林の管理や地域の料理、自然材の利用方法などを重視している。また、地域活動に関する事項の重要度については、住民の評価が全般的に最も高い。生活への密着度の差が直接反映された結果と思われる。しかしながら、こうした中でも、祭礼・祭事について新住民や交流者の評価も低くないこと、自治会運営について、他出子弟や新住民の評価も低くないことは、地域コミュニティの担い手としての可能性を考えると注目に値する。なお、5項目の中では、親戚・血縁関係の行事やしきたりである「イエ付き合い」が、すべての主体で最も低いことがわかった。

一方、年代別（住民のみを抽出）にみると、20代で低く、60、70代以上が最も高いが、50代が他の年代と比べて突出して低いことがわかった。40代は、項目により評価結果は分散しており、農業関係の技術、山林の管理について全世代の中で最

第3表 地域ナレッジの得やすさと重要度との差異（年代・地域との関わり別）

地域ナレッジ		住民	他出子弟	新住民	交流者	20代以下	30代	40代	50代	60代	70代以上	分散分析
地域資源利用	農業関係の技術	3.03 .51***	2.53 .70**	2.71 .74**	2.78 .58*	2.85 .41	2.82 .52**	2.50 1.50**	3.04 .43*	3.26 .56**	3.33 .16	A**B*
	山林の管理	3.20 .47**	2.55 .77**	2.48 .99**	3.08 .81**	2.85 .46	2.71 .86**	2.77 1.23**	3.16 .42**	3.48 .41	3.83 -0.16	***
	自然材の利用方法	2.80 .34**	2.57 .66**	2.49 .60**	2.88 .85**	2.63 .56	2.57 .75**	2.33 .81*	2.73 .30*	3.09 .20	3.19 -0.02	B**
	植物生物の生息地	2.96 .22**	2.46 .67**	2.75 .47**	2.88 .60*	2.81 .41	2.82 .50*	2.82 .64*	2.94 .08	3.11 .24	3.13 -0.14	A**
	地域の料理	2.99 .44**	2.56 .77**	2.70 .77**	2.80 .96**	2.81 .44	2.79 .54*	2.95 .64**	2.86 .51***	3.12 .40**	3.33 0.13	A**
	祭礼や祭事	3.31 .41***	2.71 .58**	2.77 .61***	2.64 .96**	2.74 .48	2.75 .96**	3.09 .68	3.30 .32*	3.79 .26	3.80 .22	***
地域活動	地域の年中行事	3.45 .03	2.89 .56**	2.79 .52**	2.83 .76**	2.93 .22	3.18 .46*	3.14 .14	3.49 -0.07	3.65 .07	3.89 -0.22	***
	イエ付き合い	3.21 -0.01	2.21 .52**	2.80 .18	2.52 .46	2.52 .37	2.93 .36	2.91 .05	3.34 -0.15	3.56 -0.06	3.48 -0.13	***
	近所付き合い	3.33 .37**	3.00 .66**	2.88 .56**	2.57 .50	3.11 .26	3.07 .50**	3.09 .55	3.26 .32**	3.67 .46*	3.64 0.27	A***B*
	自治会運営	3.19 .41***	2.72 .74**	2.63 .80**	2.57 .50	2.67 .30	2.82 .57*	2.82 .95**	3.10 .36**	3.61 .55**	3.78 0.02	***

注：1) 年代については、地域との関わり「住民」のみにてクロス集計した。

2) 上段は重要度、下段は得やすさ・所有との差（[重要度]-[得やすさ・所有]）。網掛は0.7以上の差のもの。

3) グループ間の分散分析による検定は、A：地域との関わり間、B：年代間で有意。但し、ABが同じ場合は***のみ示す。

4) *p<.05, **p<.01, ***p<.001。

も高く、祭礼・祭事、自治会運営なども比較的高い。また、30代では、祭礼・祭事、地域の年中行事などいわゆる地域の伝統に対する評価が相対的に高い。項目別では、自然材の利用方法が、20代、30代の若い世代のなかで比較的高く、これは都市住民である交流者と同じ傾向である。農村部であっても若い世代は都市住民と同じような認識を持つようになっていると推察される。

3 得やすさと重要度

第3表(上段)は各地域ナレッジの得やすさ(所有、:既に有している場合も含む)について、同様にクロス分析した結果である。まず地域との関わり別にみると、多くの項目で、住民の方が知識を得やすい状態であった。しかしながら、地域資源利用に関する項目ではその差が小さい傾向がある。特に、山林の管理、自然材の利用方法などについては、交流者が他出子弟や新住民はもとより住民よりもナレッジを得やすい。これは交流者が里山活動などをテーマにして交流活動をおこなっているためと思われる。また、外に出ている他出子弟がイエの付き合いについてのナレッジが非常に得られにくいこともわかった。

一方、年代別にみると、全般的には、年齢とともに地域ナレッジの得やすさ・所有が高まっていることが明らかになった。その中で、特に、40代を中心に、農業関係の技術や自然材の利用について得ることが難しい状態にあることがわかった。その理由としては、農業関係の技術は共同体験が少なくなっていること、自然材の利用については既に失われつつあることが考えられる。また、20代以下や30代が、40代より得やすい状態であることが確認されるが、それは世代として親が健在であり親子間で知識が共有されやすいことが要因の一つではないかと推察される。なお、近所付き合い、地域の年中行事などは、全世代を通して得やすいと評価されている。

次に、先にみた地域ナレッジの重要度と得やすさ・所有との差を求めた。第3表の下段はその結果を示したものである。重要度との差が大きいものは、求められているにも関わらず手に入れにく

い、重点的に共有化の対策を考える必要がある地域ナレッジであり、差が小さいまたは逆転しているものは、反対に、現時点でその必要性が低いナレッジである。地域との関わり別にみた場合、住民以外の方が、全般的に差が大きいことがわかる。その中でも他出子弟と新住民は同じ傾向にあり、農林関係の技術、山林の管理、地域の料理、そして自治会運営にて差が大きい。それに対して、交流者は、直接的な関係が薄い農業関係の技術や自治会運営に対しては興味をもたず差が小さいが、自然材の利用方法、祭礼・祭事、地域の年中行事といった項目については求めに応じておらず差が大きいことがわかった。

また、年代別にみると、40代、30代、そして20代といった若い世代にて差が目立つ。特に40代では項目によって大きく分かれる。40代は農業関係の技術、山林の管理、自治会の管理など実利的問題に関するナレッジについては、手に入りやすさのギャップはかなり大きく、危機感をもっていることが明らかになった。また、30代、20代では、祭礼や山林や自然材の利用などのナレッジにて差が大きいことがわかった。

4 地域づくりと地域ナレッジの共有

最後に、住民だけを対象に小学校区での地域づくり活動をすすめる「まちづくり協議会」のワークショップ参加の有無と、地域ナレッジの得やすさ・所有との関係を分析するため、参加者、非参加者の平均値をそれぞれ求め比較した(t検定により差の有意差を検定)。

第4表に示すように、参加者は地域活動に関するものを中心に多くの地域ナレッジを得やすい状態であることがわかる。また、各ナレッジを重視する意向も高く、地域づくりワークショップの場が、地域のナレッジの集積の場となっているとともに、共有の場として機能すると考えられる。なかでも自治会運営についての重視度が極めて高いことが特徴であるが、その得やすさ・所有度が低く、現状では最も欠乏感を感じている事項であることが明らかになった。

第4表 ナレッジの得やすさ・所有とWS参加

地域ナレッジ		参加者	非参加者	
地域資源利用	農業関係の技術	3.89	3.45	*
		3.31	2.95	*
	山林の管理	4.00	3.60	*
		3.58	3.11	*
	自然材の利用方法	3.42	3.08	*
		2.84	2.80	
植物生物の生息地	3.52	3.10	*	
	3.16	2.91		
地域の料理	3.64	3.38		
	3.28	2.91	*	
地域活動	祭礼・祭事	4.04	3.69	*
		3.63	3.22	*
	地域の年中行事	3.80	3.45	*
		3.78	3.38	**
	イエ付き合い	3.41	3.19	
		3.52	3.14	*
	近所付き合い	3.93	3.73	
		3.58	3.27	*
自治会運営	4.20	3.48	***	
	3.65	3.07	***	

注:1) 上段は重要度, 下段は得やすさ・所有。

2) *p<.05, **p<.01, ***p<.001。

IV まとめと今後の課題

以上のように, 基本的に, 年配者, 定住する住民が地域ナレッジを得やすく, それを所有しているが, 若い世代や外部者に伝わりにくい状態であること, 地域資源利用に関する分野については, 交流者のような外部者の方が重視しているものの得やすさとの間にギャップがみられることが明らかになった。また特に, 住民内の年代間では, 地域ナレッジを比較的得やすい状態にありながら, その重要度を低く評価する傾向がみられることがうかがえる50代の現状維持的な意識と, 農業関係技術や山林の管理を中心としたナレッジが手に入れにくい, その重要度を評価する40代の意識, そして, 自然材や伝統に興味をもつという交流者など都市住民と似た価値傾向をもつ20, 30代といった構図が考察された。

今後の地域ナレッジ共有においては, ①まちづくりワークショップの場の活用による総合的な知識の共有のための実践活動の促進すること, ②地域住民にとって重要性の高い分野(残したい分野),

手に入れやすさとのギャップが大きい分野について, コミュニティの担い手となる多様な主体とともに協議し, 分野を絞った戦略的な共有の場を設定すること, ③交流者をはじめ他出子弟, 新住民など多様な担い手の関心や能力を活用し, 文章化や映像化などによる地域ナレッジの形式知化をすすめることなどが求められる。

以上の結果は, いうまでもなく今回とりあげた一地区の事例研究に基づくものではあるが, 我が国の中山間地域全般が抱える地域ナレッジの実態と課題としてあてはまりうると思われる。今後, 多くの地域を対象にした事例研究や定量的な調査を実施することにより検証と課題解決の方策を検討することが研究上の課題である。最後に本調査をご協力頂いたK地区の皆様, 篠山市役所企画課の方々にこの場を借りて謝意を申し上げる。

【引用文献】

- [1] Michael Polanyi, (訳) 高橋勇夫, (1983) 『暗黙知の次元』, 筑摩書房。
- [2] 野中郁次郎・竹本弘高, (訳) 梅本勝博 (1996) 『知識創造企業』, 東洋経済新報社。
- [3] 深町拓司・星野敏 (2006) 「地域資源管理に関わる知識の偏在と継承の問題-兵庫県稲美町のため池管理を対象にして-」 『農村計画学会誌』 25論文特集号, pp.359-364。